

第一節 長崎醫學校の成立

明治九年三月二十八日以来、長崎医学再興の努力が実つて、六月二十日に長崎病院医学場として開場式を挙げ、その後も整備に努めていたが、明治十年十一月二十日、長崎県公文係、衛生係では文部大輔田中不二麿に対して「公立医学校設立之儀伺」と共に、名称を長崎醫学校と改めて整備した教則に、校員履歴、教員給料、生徒数、授業料、学校費などを添えて提出し、十二月十日に文部省開学部許可を得た。そして十二月十七日、長崎県に届けられた。これは学第二五五九号、一ノ第四二四号として取扱われているが（至明治六年五月至十年十二月、官省指令留）、印刷に付されたようである。

公立医学校設立之儀伺（貼紙にて「此処活版ニハ除ク（大坪）」と記載あり。）

一 学校位置

第五大学区長崎県管下第一中学区内小島郷

一 学校名称

第五章 長崎醫学校

長崎醫学校
一 学科
醫學
教則

第一条

教授ハ外国教師レウエン氏担任スト雖モ元ト醫學ノ普及ヲ謀リ実地修業ヲ主トシ醫術早成ヲ期スルカ故ニ生徒外国語学ヲ修ムルノ暇ナカル可シ依テ日本教員是ヲ補助シ講義ハ総テ国語ヲ以テ授ク可シ

第二条

一 全科卒業ノ満期ヲ予メ四年ト定メ六ヶ月ヲ一期トメ各科ヲ区分スル事左ノ如シ

第一期

解剖学

算学物理学大意

第二期

生理学附厚生物学大意

物理学化学大意

第三期

第一節 長崎醫学校の成立

生理学薬剂学

化学動植物学大意

第四期

薬剂学病理治療学

動植物学大意

第五期

病理治療学外科学

薬剂製煉学大意

第六期

病理治療学外科学

綱帶学

第七期

外科学眼科学

内科臨床講義

第八期

眼科学産科学

産外科臨床講義

但シ右ノ如ク区分スト雖モ教場ノ都合ニヨリ前後斟酌スル

事アル可シ

第三条

一 試問ヲ二類ニ分チ一ヲ大試問トシ一ヲ尋常試問トス

第四条

一 尋常試問ハ教授ノ都合ニヨリテ数度之ヲ為シ其点数ノ多

寡ヲ以テ一級中ノ座次ヲ進退ス

第五条

一 大試問ハ各科ノ終リニ之ヲ為シ尋常試問ニ占ル所ノ点数ヲ参合シ以テ其等級ヲ昇降ス尤モ落第スルモノハ次ノ科ニ移ラシメス同科ヲ温習セシム

但シ二回ノ試問ニ落第シ教員等ノ見込ニ因テ成業ノ目のナキモノハ退学ヲ命ス

第六条

一 大試問ハ衛生係官員臨席教官之ヲ為スモノトス

校則

第一条

一 入学願書ハ他府県ノモノハ第一書式管内ノモノハ各区撰

之ヲ第二書式ニ準シ正副二通該校ヘ差出スヘシ

除ク第一書式 用紙美濃紙

私儀鑒術志願ニ付今般御校ヘ入学仕度御差許被下候上ハ御規則等堅ク遵守可仕候因テ保証人相立此段奉願候也

何府県第何大区何小区何村町

何番地住居

旅籍 戸主(或ハ何某何男如シクバ兄弟)

当時当県下第何大区何小区何町某誰方寄留

年月日

何 某 印

鑒学校宛

当年何年何ヶ月

保証人ノ書式

右人入学中一身ノ儀ニ付私引受可申候也

第壹大区何小区何町何番地居住

士族或ハ平民

保証人 何 某 印

第二書式 用紙同前

私儀寮術志願ニ付今般御校へ入学仕度御差許被下候上ハ御規則等堅ク遵守可仕候因テ区戸長奥印ヲ取リ此段奉願候也

第何大区何小区何町何番地居住

族籍 戸主或ハ何某何男如シクハ兄弟

年号月日

何 某 印

当年何年何ヶ月

暨学校 宛

前書之通相違無御座候因テ副書進達仕候也

区 戸 長 印

第二条

一 正課時間ハ午前八時乃至十一時午後一時乃至三時ト定メ
拍鐘ヲ以テ始終ヲ報ス此ノ時間各自講堂ニ出席メ講義或
ハ復講ヲ受ク可シ

但シ夜間一定時教員或ハ先進生会主トメ会説復説等ヲ
ナス事アル可シ

第三条

一 生徒ノ年齢ハ限定セスト雖モ十五歳以上ニシテ本邦ノ訳

第五章 長崎暨学校

書等ヲ通読解意シ得ルモノニ限ル可シ

第四条

一 全科卒業ニ至ル迄ハ妄リニ帰省退学スルヲ許サス

但シ不得止事故アルトキハ区戸長ノ添書ヲ以テ其ノ旨
願出ヘシ

第五条

一 生徒修学年限并授業約束等ハ惣テ教則ノ旨ニ従フ可シ

第六条

一 生徒外出等ノ時ハ別シテ礼節ヲ守リ決而粗暴ノ所業無之
様又タ濫リニ酒樓或ハ遊場等ニ立寄ル可ラス

第七条

一 通学生徒若シ住居或ハ寓所ヲ転シ候節ハ其都度書面ヲ以
テ本校へ届出可シ

第八条

一 通学生徒ト雖モ本校教場ニ在リテハ一般ノ規則ヲ遵守ス
ルモノトス

第九条

一 病氣事故アリテ当日ノ聴講ヲ闕ク片ハ前以書面ニテ其旨
生徒取締へ届出ス可シ

但無届闕席ノモノハ相当ノ処分アル可ク数度ニ及フト
キハ退学ヲ命ス可シ

第十条

一 教場備附ノ器械書籍等ヲ許可ナク取扱フ可ラス

第一節 長崎醫學校の成立

第十一條

一 正課間ハ喫煙雜談等不行跡ノ振舞ヲ為スヘカラス

第十二條

一 生徒授業料ハ自他府県ノ別ナク 各区撰択生 一ケ月金五拾錢ツ、毎月廿日限納ムヘシ

舍則

第一條

一 舍中ニアッテハ都テ舍長ノ指揮ニ從フヘシ

第二條

一 入舍生徒ハ各礼節ヲ尚ヒ信義ヲ旨トシ互ニ切磋勉學ス可シ

第三條

一 講堂ニ出席スルニハ必ス袴或ハ羽織ヲ着ス可シ

第四條

一 舍内ハ毎日晨起後直ニ掃除シ書籍器械衣服等ヲ取乱ス可ラス 總テ清淨ヲ要ス可シ

第五條

一 食餌間ハ行儀ヲ正シ雜談スヘカラス

第六條

一 舍内戸障子或ハ壁等ニ瑕附或ハ落書ス可カラス

第七條

一 夜間ハ勿論昼間ト雖モ放課間ノ外他出ヲ禁ス

第八條

一 止ムヲ得サル事故アリテ臨時外出ヲ願フモノハ事實ヲ糺シ差許ス事アルヘシ

第九條

一 外出散步中ト雖モ容儀ヲ正シ言語ヲ慎ミ苟モ學生ノ恥ツヘキ所行アルヘカラス

第十條

一 病ヲ称メ日課ヲ闕クモノハ当日ノ外出ヲ禁ス

第十一條

一 常例休日ハ前夜ヨリ当日ノ鎖門マテ外出勝手タル可シ

第十二條

一 舍内ニ在テ猥リニ音読スヘカラス

第十三條

一 他ノ勤學及ヒ安眠ヲ妨ク可ラス

第十四條

一 何事ニヨラス一己ノ私ヲ挟ミ他生ヲ煽動ス可ラス

第十五條

一 晨起午前第六時就睡午後第十時トス

第十六條

一 鎖門時限ハ午後七時タル可シ

第十七條

一 食餌時限ハ朝七時昼十二時夕五時タリ
但シ右三條ハ日ノ長短ニ準シ斟酌アル可シ

禁 条

- 第一条 教場出席ノ時限ニ後ル、事
- 第二条 教場ニアツテ許可ナク猥リニ異見ヲ述フル事
- 第三条 正課時間猥リニ自席ヲ離レ或ハ他席ヲ犯ス事
- 第四条 教場ニ在テ私ニ談話シ或ハ喫烟スル事
- 第五条 許可ナク猥リニ教場ニ入ル事
- 第六条 縦覧器械及ヒ書籍ヲ場外ニ持出ス事
- 第七条 断ナク教場闕席スル事
- 第八条 喧嘩口論ヲナス事
- 第九条 内外ノ病客ニ対シテ粗暴ノ振舞ヲナス事
- 第十条 晨起ノ時間ヲ守ラサル事
- 第十一条 舎室内ノ掃除ヲ怠リ書籍器械及ヒ衣服等ヲ取乱ス事
- 第十二条 猥リニ集会雑談或ハ小説稗史ヲ読ミ無用ノ書画玩弄物ヲ取扱フ事
- 第十四条 他人ノ勤学及安眠ヲ妨クル事
- 第十五条 外人ヲ許可ナク室内ニ入ル、事
- 第十六条 許可ナク室内ニテ飲食スル事
- 第十七条 帰舎門限ニ後ル、事
- 第十八条 出門定例ノ外許可ナク外出スル事
- 第十九条 校内ニ在ル公物ヲ破毀シ又ハ之ヲ遺失スル事
- 罰 則
- 第一条

第五章 長崎醫学校

禁条第一条ヨリ九条ニ至ルノ簡条ヲ犯シタルモノハ一週間乃至三週間門外散步ヲ禁シ通学生ナレハ講堂使役ヲ命ス

第二 条

禁条第十条ヨリ十六条ニ至ルノ簡条ヲ犯シタルモノハ二週間乃至四週間門外散步ヲ禁シ或ハ講堂舎内ニ使役ス

第三 条

禁条第十七条ヨリ十八条ニ至ルノ簡条ヲ犯シタルモノハ三週間乃至五週間門外散步ヲ禁シ或ハ使役ス

第四 条

禁条第十九条ヲ犯シタルモノハ損失物品ノ価ヲ償還セシム

第五 条

数度規則ヲ犯シ或ハ一己ノ私ヲ挟ミ他生ヲ煽動シ教員舎長及ヒ生徒取締ニ抗スル等ノ如キ正条ナシト雖モ退校ヲ命スル事アルヘシ

教員履歴〔此以下活版ニハ除ク（大村）ト貼紙ス〕

石川県貴属士族

吉 田 健 康

三十年七月

一 文久元戊年ヨリ慶応三卯年都合六年間越前福井醫学校ニ於テ洋籍並ニ醫學伝習

一 慶応三卯年ヨリ明治四未年迄都合五年間長崎醫学校ニ於テ蘭医マンスヘルト続テレウエン氏及ケールツ氏ニ随ヒ醫學伝習ス

第一節 長崎醫学校の成立

- | | | | |
|---|-----------------------|-------------|----|
| 一 | 任少助教 | | |
| 一 | 辛未六月 | 大 | 学 |
| 一 | 任文部少助教 | | |
| 一 | 辛未八月十九日 | 文 | 部省 |
| 一 | 任文部中助教 | | |
| 一 | 辛未八月 | 文 | 部省 |
| 一 | 九等出仕申付候事 | | |
| 一 | 壬申十一月九日 | 文 | 部省 |
| 一 | 免出仕 | | |
| 一 | 明治七年十月卅一日 | 文 | 部省 |
| 一 | 奉職満三ヶ年以上ニ付為其實目録之通被下候事 | | |
| 一 | 目録金七拾五円 | | |
| 一 | 明治七年十月卅一日 | 文 | 部省 |
| 一 | 備申付月給金七拾円差遣候事 | | |
| 一 | 明治七年十一月一日 | 文 | 部省 |
| 一 | 勤務中勉励ニ付目録之通り被下候事 | | |
| 一 | 目録金貳拾五円 | | |
| 一 | 明治七年十二月廿四日 | 台湾蕃地事務局 | |
| 一 | 長崎病院雇申付月給金五拾円下賜候事 | | |
| 一 | 明治八年四月三十日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 長崎病院々長申付候事 | | |
| 一 | 明治八年五月十四日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 月給金貳拾円増加候事 | | |
| 一 | 明治九年一月廿八日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 医学場長兼務申付候事 | | |
| 一 | 明治九年六月十三日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 厳原分派病院巡視トシテ出張申付候事 | | |
| 一 | 明治九年八月二日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 出張陸軍御用雇申付月給金八拾円給与候事 | | |
| 一 | 明治十年三月廿三日 | 山田陸軍少将 | |
| 一 | 当旅団附差免候事 | | |
| 一 | 明治十年四月五日 | 別働隊第二旅団 | |
| 一 | 征討別働隊第三旅団附屬被 仰付候事 | | |
| 一 | 明治十年四月五日 | 征討別働隊第三旅団本陣 | |
| 一 | 長崎病院エ出張被 仰付候事 | | |
| 一 | 明治十年四月五日 | 征討別働隊第三旅団本陣 | |
| 一 | 任陸軍々暨 | | |
| 一 | 明治十年五月九日 | 征討總督本營 | |
| 一 | 征討軍団病院附被 仰付候事 | | |
| 一 | 明治十年五月十四日 | 征討總督本營 | |
| 一 | 長崎病院長雇申付候事 | | |
| 一 | 明治十年六月廿九日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 長崎醫學場長兼務申付候事 | | |
| 一 | 明治十年六月廿九日 | 長 | 崎県 |
| 一 | 月給金七拾円給与候事 | | |
| 一 | 明治十年六月廿九日 | 長 | 崎県 |

一 当分之内月給金貳拾円六錢給与候事

一 明治十年七月十四日

長崎県

一 鹿児島県逆徒暴挙ニ際シ於其病院負傷者治療中職務致勉
励候ニ付為慰勞警視局ヨリ別紙目録之通酒肴料回送有之
候条此段相達候事

目録金貳拾五円

明治十年八月三十日

長崎県

山口県士族 国富 僊太郎

廿九年

一 慶応元年丑正月ヨリ同二年寅十一月マテ長州徳山蘭方鑿
遠藤春袋ニ從ヒ内外科治療実験

一 慶応三年卯二月ヨリ明治二年巳三月マテ長州山口好生堂
ニ於テ蘭学修業

一 明治二年巳四月ヨリ同三年午十二月マテ山口好生堂ニ於
テ蘭学修業中舎長兼種痘及ヒ書籍掛相勤メ御手当金トメ

一 明治四年末二月ヨリ同六年酉正月マテ蓄費ヲ以文部省長
崎鑿学校ニ入塾シ和蘭ヘールツ氏ニ從ヒ預科専務伝習

一 明治六年酉正月ヨリ文部省官費生ニ相成同長崎鑿学校ニ
於テ独乙シモンス氏ニ從ヒ羅旬語学伝習セシ事同十二月
マテ和蘭ヘールツ氏及ヒレウエン氏ニ從ヒ預科及ヒ本科
学修業セシ事同七年戌十二月一日マテ

一 退学申付候事

第五 長崎鑿学校

一 明治七年十二月廿二日

東京鑿学校

一 京都司藥場試験掛申付月給金七円相渡候事

一 明治七年十二月廿二日

文部省京都司藥場

一 依願雇差免候事

一 明治八年三月十七日

文部省京都司藥場

一 療病院教授局詰申付所勤中月給五円ト相定候事

一 明治八年三月十八日

京都府

一 療病院教授局詰差免典籍掛兼助教補申付月給拾五円ト相
定候事

一 明治八年九月十四日

京都府

一 依願雇差免候事

一 明治九年一月廿日

京都府

一 長崎病院雇鑿申付月給三拾五円支給候事

一 明治九年一月廿八日

長崎県

一 治療掛兼鑿学場助教申付候事

一 明治九年六月十三日

長崎県

一 場長吉田健康陸軍御雇中代理申付候事

一 明治十年三月廿四日

長崎県

一 当分之内月給金五円増給候事

一 明治十年六月四日

長崎県

一 長崎鑿学場長代理差免候事

一 明治十年六月廿九日

長崎県

一 鹿児島県暴挙ニ際シ於其病院負傷者治療中職務上致勉勵

第一節 長崎醫学校の成立

候付為慰勞警視局ヨリ別紙目録之通酒肴料回送有之候条
此段相違候事

但目録金貳拾円

明治十年八月三十日

長崎 県

石川県士族

山脇 泰 助

廿五年

慶応二寅七月ヨリ明治二巳一月マテ都合四ヶ年間越前福
井濟生館ニ於テ洋学修業傍ニ田代萬隆ニ就テ医術修業
明治二巳一月ヨリ藩命ヲ受ケ東京大学東校エ遊学醫學伝
習セシ事三年午三月マテ

三年午三月ヨリ長崎醫学校エ遊学シ「ヘールツ氏ニ就テ
予科専務伝習セシ事五年申七月マテ五年申七月ヨリ「レ
ウエン氏ニ就テ本科並ニ「ヘールツ氏ニ就テ予科学伝習
セシ事七年戌十一月マテ「シモンス氏ニ就テ羅甸学伝習
セシ事六年酉一月ヨリ同十二月マテ

但六年酉一月ヨリ文部省官費ヲ受ケシ事七年十二月廿
二日マテ

退学申付候事

明治七年十二月廿二日

東京医学校

當場エ相雇一ヶ月金七円相渡候事

明治七年十二月廿二日

東京司藥場

當場エ相雇一ヶ月金拾円相渡候事

明治八年四月一日

京都司藥場

伝示掛申付候事

明治八年五月廿日

京都司藥場

雇中金七円増加候事

明治八年五月廿日

京都司藥場

内務省御雇申付月給拾七円下賜候事

明治八年六月廿七日

内務 省

月給拾七円賜来候処三円増加候事

明治八年十一月十二日

内務 省

依願御雇差免候事

明治九年一月廿二日

内務 省

長崎病院雇申付月給三拾円支給候事

明治九年一月廿八日

長崎 県

治療係兼藥學場助教申付候事

明治九年六月十三日

長崎 県

出張陸軍御用雇申付月給金五拾五円給与候事

明治十年三月廿三日

長崎 県

出張陸軍雇申付月給五拾五円支給候事

明治十年三月廿三日

山田陸軍少将

出張陸軍御用済ニ付雇差免候事

明治十年七月十六日

長崎 県

教員給料

一ヶ月 金七百八拾円
一ヶ月 金六拾五円

但 老人 金三拾五円
老人 金三拾円

一 生徒 但区撰寄宿生

八拾三人

一 通学生徒

七拾三人

一 右通学生徒受業料

一ヶ年 金四百三拾八円
一ヶ年 金三拾六円五拾銭

但 老人ニ付 金五拾銭

一 学校費用

書籍器械等入費 一ヶ年 金六百五拾円
一ヶ月 金五拾四円拾六銭六厘六毛余

營繕入費並 一ヶ年 金五百〇三円六拾三銭
諸 雑 費 一ヶ月 金四拾八円三拾銭貳厘六毛六

雇入生徒取締 給料 一ヶ年 金三百三拾六円
小使等 一ヶ月 金貳拾八円

右費用總計 一ヶ年 金貳千貳百六拾九円六拾三銭
一ヶ月 金百八拾九円拾三銭五厘八毛余

御委托金ナシ

右之通設立仕度此段奉伺候也

明治十年十一月廿日

長崎県大書記官 河内直方 (長崎県大書記官)

文部大輔 田中不二麿殿

第五章 長崎醫學学校

(以下朱)
伺之通 (開学部印)
文部省

明治十年十二月十日

この許可を得た長崎県権令内海忠勝は、十二月二十二日に至り、甲第百三十七号を以て、長崎医学場の改称と長崎醫學学校諸規則改定を布達した。別冊は上掲の教則等である。

甲第百三拾七号

長崎医学教場の儀自今長崎医学学校ト改称別冊之通諸規則改定候条此旨布達候事

明治十年十二月廿二日

長崎県権令 内海忠勝

「明治十九年十二月調、本県下教育沿革史、長崎県第二部学務課」に次の記載がある。

医学 校

明治九年三月長崎病院前稿ニ出ツニ於テ医学学校ヲ再興セント欲シ各区々戸長ニ令シ生徒撰挙及ヒ校費学資ノ賦課法ヲ論シ教則舎則等ヲ頒布ス抑病院ハ曩ニ文部省所轄ニシテ明治八年再ヒ本県ノ所轄ニ属セリ爾来政府亦之ヲ永遠ニ保持センヲ欲シ特命ヲ以テ一時為ニ官費ヲ給セラルニ至ル前稿ニ出ツ

第一節 長崎醫学校の成立

而テ明治十一年ニ至テハ之ヲ管内人民ノ共立トナシ益其盛大ヲ謀ラントス故ニ客年開院以來殊ニ教師ヲ外国ニ招キ以テ患者ノ治療ヲ委託セリ然モ本県ノ所轄タルヤ東西百余里山復リ海隔リ其僻陋ニ至テハ從來医業ノ普ラサルヨリ衛生ヲ度外ニ措キ往々虜人トナル者尠ラス畢竟人智ノ未開ニ由ルト雖モ亦之ヲ保護上ノ欠典ト謂サルヲ得サルナリ於是本院ニ於テ医学校ヲ再興シ生徒ヲ教育シ以テ医業ヲ普及セシメ上ハ政府ノ盛意ニ答ヘ下ハ管民ノ幸福ヲ共ニセントス仍テ管内各区ヨリ生徒二名ヲ撰挙入学セシメ親ク教師ニ就テ其教科ヲ履ミ其技術ヲ学ハシメ三四年ヲ經テ其成業ノ期ニ及ンテ特診証書ヲ与テ阪区セシメ区民ノ治療ヲ托シ且以テ生徒ヲ教授セハ僻境ノ人民其命脈ヲ全フスルヲ得テ衛生ノ主旨亦以テ達スルヲ得可シ雖然生徒成業ノ日ニ至テハ各其志ヲ齎シ東行南遊ノ企テナキヲ保ス可ラス故ニ予メ其法ヲ設ケ区民ノ為ニ撰挙セラレ入学スル者ハ則其修学中ノ資費一月凡金四円トスハ区民ヨリ之ヲ弁給シ成業ノ後ニ至リ亦年限ヲ定メ互ニ条約書ヲ交取シテ敢テ他方ニ転從スルヲ得サラシム可シ而テ校費試課ノ法ハ其管繕及ヒ器械書籍教員給料生徒食費等ノ概計金額ニ拠リ一戸ニ課スル三錢五厘トセハ管下拾四万四千六百八拾九戸ノ内對馬一國ヲ除キリ厳原ニ派出病院ア 拾三万八千〇九拾九戸ナリ至貧者十分一ト見做モ拾二万四千三百戸アリ則金四千三百五拾円五拾錢ヲ得可シ以テ校費一年ヲ支ユルニ足ル然則区民僅々ノ賦課ニヨリ之ヲ緩漫ニ付シ以テ貴重ノ人命ヲ忽ニス可ンヤ県庁亦自ラ

之ヲ舉行セサルヲ得サルナリ庶幾ハ区戸長能其旨意ヲ察知シ生徒撰任及ヒ學費課出法等更ニ人民ノ共議ヲ尽シ以テ衛生ノ主旨ヲ全フセンヲト

教 則 (略)

舍 則 (略)

通学心得 (略)

同十年十二月廿二日長崎医学場ヲ再ヒ長崎医学校ト改稱スなお、この文書の前の頁に次の記載がある。

○十年 公立医学校 二ヶ所 増減ナシ

生徒 二百九拾七人 増減ナシ

これらによつて長崎医学場から長崎醫学校と改称された事情を覗うことができるが、次に長崎病院のこの年十二月の人事異動を抄録しておこう。

十二月十三日、厳原病院詰、長崎病院治療掛金原文亮及び厳原病院詰、長崎病院護長兼助教大塚長吉は長崎病院に帰院した。これについては吉田健康は十二月十日、「厳原分派病院医員交代之伺」を県に呈出し、前記二名は去る十月で満一ケ年なので、交代人を指向けるべきであったのに、コレヲ流行で本院医員も劇繁であつたため、延期するよう御達があつたが、漸くコレも消滅したの

月の蒸氣便で交代人を指向けることにした。それで薬局係阿部権は至極相当の人と見込み、月給二十円で採用されるようにしている。又、薬局掛大塚長吉の代りは蔵原支庁長松尾光徳より上申書（十二月十四日附、本庁第一課宛）が提出されていて、蔵原病院生徒三山幡次郎、神岡権之進が薬局係（月給三円）に採用された。

十二月二十五日、四等属小倉左文の起案によれば、長崎病院長吉田健康は春以来、西南騒擾に際し、陸軍々医を拝命したが、尚、御雇入になっていて、去る六月以来、月給その他共九十円六銭のうち、八十円は警視病院より、残り十円六銭は長崎病院より支給して来たところ、追々騒擾も平定したので、陸軍病院は先般引揚げられ、現今右九十円六銭の全部を長崎病院より支給している。それで、来る十一年一月より元通りにし、又、田口秋桂、国富仙太郎（五円増）も同様差止めることになって、その辞令は十二月二十八日に発せられた。こうして医学教育の場たる長崎醫学校は着々と再興の実を挙げて行った。

明治十一年（一八七八年）は西南の役の終結によって、

第五章 長崎醫学校

国内が安定し、三月二十日、東京府会の開会をみたが、衛生行政も予防医学の発展を示した。即ち三月二十六日、奥布埜利亜予防法心得の制定、四月十八日には有害飲食物着色料の取締が行われ、五月二十八日地方官庁に衛生担当吏員の設置がなされ、七月二十二日には郡区町村編成法の制定があつて、従来の郡区制が整備されるようになり、府県費及び医費が地方税と改称されるに至つた。そこで長崎醫学校も府県費及び区費で設立されていたのが、地方税を以て設立されて行くことになったのである。又、八月二十一日には薬用阿片売買製造規則が達せられているが、次に再び長崎醫学校の明治十一年の歩みを回顧しよう。

一月八日、前年度の決定に従つて長崎醫学校と改称し、規則を改正し、長崎県医務係の管轄に属していた醫学校は、その費用には定額なく、院費を県内各区に賦課して支弁した。

四月十六日、長崎県権令内海忠勝代理として、長崎県大書記官高橋新吉は乙第七十七号を以て、各区々戸長宛

第一節 長崎醫学校の成立

てに長崎醫学校区費生徒退校許可条件を達した。

各区々戸長

長崎医学校区費生徒ノ儀目今左ノ条件ヲ除クノ外ハ叩リニ退校不相成候条生徒撰挙ノ際本人並親戚ノ者ヘ篤ト差示シ条約中ニモ其旨記載為致可申尤右条件ノ事故ヲ以退校願出許可候共費用償却ノ儀ハ入校ノ節互ノ条約上ニ可有之儀ニ付其旨相心得可申此段相違候事

明治十一年四月十六日

長崎県権令 内海忠勝代理

長崎県大書記官 高橋新吉

- 一、入学ノ後難治ノ病痼ニ罹ル者
- 一、戸主死亡スル歟或ハ不得止事故アリテ其人ヲ要セサレハ一家ノ浮沈ニ関スル等ノ事実アル者
- 一、父兄病氣若クハ事故アツテ父兄ニ代リ家ヲ治ル等ノ事故アル者

さて、明治九年六月二十日、長崎醫学校創立当時、購入した書籍器械類の目録はその後の購入品目と共に「長崎医学校書籍目録」と題して「明治十一年自一月至四月学務課教育挂事務簿、教育ノ部第一」に収められている。

次に全部を示そう。

明治九年六月長崎医学校創立ニ付病院長吉田健康登京購求

之書籍器械目録

器械ノ部

人工体	一具	但附属品共
半面人工	一具	
関節維持人骨	一具	
糸維人骨	一具	
大顯微鏡附硝子板	一具	
検温器	式本	
バロメートル	一箇	
常用天秤	老挺	
酒精燈台附	一箇	
吹管	一箇	
試験管	九拾六本	
格尔布	拾八箇	大中小
陶製小皿	五枚	
ヘーケルハラス	拾三箇	壹枚
蒸発皿	拾二枚	
白金板	八分四厘	
白金糸	八分八厘	
玻璃管	七貫四拾目	
攪和掉	拾三本	
玻璃漏計	大中小 式拾五箇	
時表玻璃	十三枚	

一	玻璃板	白紅緑	十五枚	一	書籍ノ部	一冊
一	乾燥器	一箇	一箇	一	解剖彩色図板	一部九冊
一	ワ―テル壘	一箇	一箇	一	眼科摘要	一部一冊
一	塩化加里斐母管	六箇	六箇	一	外科通論	一部一冊
一	マ―トシリントル	一本	一本	一	理札薬物学	一部拾五冊
一	ヒ―ヘット	三本	三本	一	造化機論	一部貳冊
一	鑑	六本	六本	一	生理發蒙	一部七冊
一	クレムカラーン	五箇	五箇	一	原病学通論	一部五冊
一	キニルクポール	六本	老組	一	診法要略	一部三冊
一	重湯煎	一箇	一箇	一	内科簡明	一部一四冊
一	列多尔篤	大中小	五箇	一	外科約説	一部貳拾冊
一	護謄管	大中小	三丈	一	産科指要	一部三冊
一	昇化管	大中小	貳箇	一	健全学	一部六冊
一	ウオルフセ瓶	二口三口	貳箇	一	急性病類集	一部四冊
一	栓木	大	貳拾箇	一	藥物鑒法	一部一冊
一	天秤	一挺	一挺	一	流行手病論	一部一冊
一	スピロメートル	一箇	一箇	一	算学摘用	貳部一部五冊
一	試験紙	一箇	一箇	一	筆算題叢	貳部一部五冊
一	蒸餾器	一具	一具	一	登高自卑	貳部一部八冊
一	ハットメートル	老本	老本	一	博物新篇	貳部一部五冊
一	ユリ子メートル	貳本	貳本	一	輿地新図	一幅
一	乳メートル	老本	老本	一	化学日記	六冊
一	玻璃器	三箇	三箇	一	医院雜誌	五部一部三冊

第五章 長崎醫学校

第一節 長崎醫學校の成立

以上

十年七月到着之部

一 リュスカ解剖書	一部	三冊
一 フレス解剖書	一部	一冊
一 フライ組織書	一部	一冊
一 同顕微鏡上組織書	一部	一冊
一 ランケ生理書	一部	
一 ウント生理書	一部	
一 コステル薬剤書	一部	
一 ノットナーヘル薬剤書	一部	
一 スミット薬剤書	一部	
一 ワフ子ル病理書	一部	
一 ホルステル病理書	一部	
一 ニーメル治療書	一部	二冊
一 ヒルシター各論病理書	欠本	八冊
一 エースト婦人病論	一部	
一 バルデレーベン外科書	一部	四冊
一 ビルロヲト外科書普通論	一部	
一 ブリュレス外科書	一部	
一 ビルロヲト外科各論	一部	
一 ハキヲマン外科病理論	一部	
一 シーマノスキ外科書	一部	
一 トロスヘル繙帶書	一部	

一 ハミルトン氏ノ骨折論	一部	
一 ラホヲト氏繙帶書	一部	
一 シウキヘンビュルク氏キリニセブツク	一部	
一 シュワキヘル氏眼科書	一部	
一 エラケル氏マラシアス	一部	
一 リーブユライフ氏カタラクト除切方書	一部	
一 バヘンステイキ氏アトラス	一部	
一 トロヲ氏耳科書	一部	
一 トボルド氏食孟頭慢性病論	一部	
一 ブリュンハ氏喉頭鏡用法及アトラハ	一部	
一 スローデル氏腫服論	一部	
一 ハノヨト究理書	一部	
一 フリュベサ子ヲワ有機舎密書	一部	
一 ホーヘル氏毛髮解剖試驗書	一部	
一 コンアウォルフ氏尿道截開術書	一部	
一 スチルリニン氏尿道狹窄論	一部	
一 エルス氏卵窠水腫論	一部	
一 ワンデルリウ医事日記	武部	
一 ヘーセル氏医事日記	宍部	
一 フリキデル打撲論	宍部	
一 シーセル氏梅毒書	宍部	
一 ワルデンビュルフ氏ブ子ウマチヒュヘ	老部	
一 ハンデリンフ	老部	

ヒュトマン医事実際書	一部
ラビュルダ氏検査書	一部
同滋養論	一部
シームソン氏電気論	一部
フキイ基礎組織書	一部
ビントフラキス病理書	一部
ビュレンヒュルフ皮下注射論	一部
度量表	一部
ヒルジョー薬剤論	一部
ビーヘル氏婦人陰部治療書	一部
ワット氏毒物検査書	一部
トーメ氏動物書	一部
シームワン氏病理治療書	一部
コーニフ氏外科書	七部
アタラス	之レマルチン氏尿道截開書ノ誤リ
アタラス	之レランケ氏生理書ノ誤リ
アタラス	但附属品共
同軸	十一本
同回解	一部
ブ子ウチセ装置	一具
トロキカル	一個
ナセット氏顕微鏡	一個
同調利物	二具

第五章 長崎醫学校

病院ニ用		護謄製小スホイ	六個
一	トロース	五寫病院使附	一具
一	驗視力鏡		一具
一	オハリクトミー		一具
明治十一年五月到着之分			
一	シームワン氏病理治療書	第六編	二冊
一	同前	第五編	二冊
一	同前	第三編	二冊
一	ヒタヒュルロツト氏外科書	第三編	二冊
一	ハミルトン氏關節学	第六編	一冊
一	トボルト氏喉頭病論		一冊
一	キユラフ氏外科書	第四編	八冊
一	ホック氏辞書		十冊
六月二十九日、医師の薬舗兼業、又は薬舗の医業兼業が禁ぜられたが、七月十日、内務省は東京に脚氣病院を設け、二部に分け、医師は洋方には佐木々東洋、小林恒、漢方には遠田澄庵、今村了菴が治療に當った。当時、これを脚氣相撲と云った。			
七月十八日、薬舗が医師の処方箋なしにみだりに合剤			
することを禁じた。七月二十九日、産婆の器械使用が禁			

第一節 長崎醫学校の成立

ぜられ、八月二十一日、薬用阿片売買並製造規則が布告された。

九月十九日、売薬規則が改正され、売薬の許可を各地方庁で行った。

「明治十一年、学区取締教員醫員辞令原書」によれば、この年九月三十日、吉田健康は長崎県令内海忠勝に宛て、「増給之儀ニ付上申」を差出した。それによると、本院内外の患者が次第に増加し、追々病院が隆盛に運び、院務も繁劇になっているが、先頃から更に警察監獄諸学校の患者の施療を担任する外、梅毒病院も本院に附属している。そこで、益々本院は隆盛を極め、愈々院務は繁劇を加え、従来的人员では行き届き兼ねる状態にあるから、然るべき人を撰挙の上、増員を伺出すべき見込であるが、差当り適当な人もなく、従来のだ員で勉めている。幸い一つとして不行届のこともないが、患者も増加し、愈々隆盛になっているのは、必竟本院勤務の諸医員が本院の隆盛を切望する赤心によるもので、格別勉励した功蹟である。中でも、左記の各員は勤労少からず、且つ又、始

めの採用の期に比べると、学術も余程進歩しているのです、この際、特別の御詮議を以て、御増給になるようにと云つて、参考のために増給金高も上申している。

現給	増給	
三拾五円	七円	治療係兼助教 国富仙太郎
三拾円	同前	同前 山脇泰介
貳拾円	同前	治療係 長尾恭平
貳拾円	同前	同前 金原文亮
拾貳円	同五円	薬局係 山川 饒

ここにおいて十月二日、小倉三等属は吉田健康の上申書に添えて、増給の件を県令内海忠勝に上申し、併せて院長吉田健康にも増給することを上申した。小倉三等属の増給申請案は次の通りである。

現給金	七拾円	増拾円	吉田 健康
一人ニ付五円ヅ、増			国富仙太郎 外三人
三円増			山川 饒

これに従って、翌二日、増給が実現された。

「明治十一年、学区取締教員醫員辞令原書」によれば、十月十六日、コレヲ予防のために、新町に長崎病院の出

張所ができ、そこへ長崎病院から医員を派出させることになり、長崎病院薬局係山川饒が当分治療掛心得として新町出張所に勤務した。

その後任として進藤孝一郎が薬局係（月給十二円）に任ぜられた。この任命は十月十六日で、山川饒の転出につき、内海県令に宛てて吉田院長より後任薬局係の採用を願ったためである。

長崎病院薬局係に採用された進藤孝一郎（二十八才）は明治二年四月大村藩医尾本涼海に随って西洋医学を学び、三年後の明治四年八月、旧大村藩知事の帰京に伴い、尾本涼海がそれに扈從したので、暇をつげた。然し、明治五年九月、東京に行き、尾本涼海と坪井信良に学ぶこと三年、明治八年四月、第一大学区東京医学校に奉職した。然し翌九年八月、病により職を辞し、明治十年七月再度東京大学医学部に奉職した。その後二年目、十一年九月、辞職したが、長崎県第九大区西郷村出身である。

十月廿三日、長崎病院附属第一微毒病院中江原思は長崎病院長吉田健康と協議の上、西山郷二百七拾五番地住

平民武井孝三郎（四十四才）を微毒病院用度係（月給金六円五十銭）に採用しよう上申した。採用されたのは十一月七日である。（明治十一年学区取締教員医員辞令原書）

長崎醫学校は明治八年四月、県の管轄に入った長崎病院に附設され、特に政府の保護のもとに、管内各区費を以て設立されていたのであるが、明治十一年十一月八日に至り、郡区制度の改正に伴って、各区の生徒撰挙の制度が廃止されることとなった。そして旧撰挙の生徒は更めて郡町村選挙生となったものも生じ、或いは自費で修学を進めるものもあって、各区より撰挙されて修学していたものの中で、この制度が廃止されても退学する者は少かったのである。

十二月七日、従来、県庶務課所轄であった醫学校及び病院は長崎県庁の機構改革に伴って、学務課の管轄に属することとなった。但し、この病院及び醫学校の管轄の変遷は長崎醫学校が純然たる県立であることを意味するものではなく、県庁の所轄である長崎病院に附設されたものであることに変りはなかった。

第一節 長崎醫学校の成立

十二月二十四日、県令内海忠勝は五ノ第二十二号を以て、県立学校に外国教師を雇入れる際はその学校長名義で条約を取結ぶ方法をとつてもよいかと文部卿西郷従道に伺を提出したが、これに対しては翌年一月九日に至り、文部大輔田中不二麿より文部省においては伺の趣旨に差支えない旨の返答を得ている。この返答は一月二十一日に県学務課に届けられた。（「明治十一年一月ヨリ十四年十二月ニ至ル官省指令留、学務課」）

次いで十二月二十五日、長崎病院用度係西政保（月給十円）、福岡作男（同上）、加幡豊次郎（七円）は二円宛増給され、同日、吉田健康は醫学校生徒取締川端経徳、同心得久松次郎、庶務掛用度係岩永平蔵の増給を上申し、同月二十八日に至り、川端に十円、岩永に九円、久松に七円交付された。（「明治十一年、学区取締教員鑒員辞令原書」）及び「明治十一年^{自十二月十六日}至同^{三十一日}学務課教育掛事務課教員以下進退ノ部、第六、完」